AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2011 年 1 月 25 日 VOL.34 第 254 号 定価 550 円
発行／ AMDA 〒 700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp

2011 年
1 月号
1

緊急救援　救える命があればどこへでも

ハイチ コレラ対応緊急医療活動

←救世軍病院（ハイチ）で、コレラ患者を診る菅波代表

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/

2010 年 1 月の大地震によりポルトープランス近郊では未だ仮設テントで生活する人びとも多数いるなか、2010 年 10 月中旬からコレラの感染が急速に広がった。これまでのコレラによる死者はハイチ全土で 3,651 人、感染者数は 171,304 人となっている（1 月 1 日ハイチ政府発表）。死者数と感染者数は、発生から 3 ヵ月経ってもなお増え続けている。10 月中旬にアルティボニット県だけだったコレラ感染エリアは、約 1 か月間でハイチ全土 10 県へ拡大した。

AMDA はドミニカ共和国から医療チームを派遣するための準備を行い 11 月 21 日に現地入りする予定だったが、コレラに対する暴動や銃を持ったデモが起こったため派遣を見送ることになってしまった。AMDA は日本で医療チームを再編成し、12 月 1 日に日本からハイチへ医療チーム（菅波医師、松本看護師、ヴィーラヴァーグ調整員）を派遣した。12 月 5 日には朴範子医師、12 月 7 日には山本太郎医師がハイチへ向けて日本を出発した。コレラの治療に必要な医薬品（経口補水液、乳酸リンゲル輸液、亜鉛液体、抗生物質、点滴チューブ、使い捨て手袋など段ボール箱 324 個分）は森田調整員がドミニカ共和国で調達し、ハイチへ陸路輸送した。

AMDA はハイチ保健省の決定に従い、首都ポルトープランスから西に約 120 キロに位置するフォンデネグ（Fonds des Negres）市内のサルベーションアーミー（救世軍）病院で医療活動を行なった。AMDA 医療チームは病院スタッフと共に、12 月 7 日から 24 日までの 16 日間で 108 人のコレラ患者を診療した。12 月 15 日に病院で初めてのコレラによる死亡者が発生、12 月 24 日までに 8 人の方がコレラで亡くなっている。サルベーションアーミー病院では、病院内にある隔離部屋をコレラ室として使っている。定数 15 床のコレラ室に最多で 26 人の患者が入院していた。コレラ室は他の病棟と近く、キッチンへの出入口となっており、手洗い場所も消毒液もない。コレラ患者の世話は家族が行っており、コレラ室を頻繁に人が出入りしている。

12 月 17 日からは森田調整員と AMDA カナダ支部のオズボーン助産師が当病院に入り、日本から派遣された医師・看護師・調整員が 12 月 20 日に帰国するに際し、活動を引き継いだ。二人が引き継いだ直後から病院スタッフの多くがクリスマス休暇を取って人出不足になった。オズボーン助産師と残った病院の看護師がコレラ患者の治療にあたることになった。オズボーン助産師は 12 月 22 日の活動報告に「下痢と脱水症状の激しい男性患者がいた。私は、点滴の袋を一日に 4 回交換し、できる限り側に付き添い、一日中経口補水液を飲ませていた。彼はその日の晩に亡くなってしまった。」と書いている。この男性には、妻と 3 人の子どもがいつも付き添っていた。死亡を確認した際、この家族らはショックで一時間以上もコレラ室で泣き叫んでいた。

12 月 25 日からは、病院スタッフが平常業務に戻り、コレラ室にも複数の医師と看護師が働く姿が見られるようになった。AMDA 医療チームはこれまでの活動を病院スタッフへ引き継ぎ、12 月 26 日に救世軍病院での活動を一旦終了した。1 月 5 日には AMDA 本部ヴィーラヴァーグ調整員を再びハイチへ派遣した。ヴィーラヴァーグ調整員はフォンデネグ市救世軍病院の責任者と今後のコレラに対する医療活動について話し合った。病院側から AMDA に対して更なる医療チームの派遣要請があった。AMDA は次の医療チームの派遣に向けて準備を行なっている。

＊ 朴　範子　医師

派遣期間:2010 年 12 月 5 ～ 20 日(報告書より抜粋)

1）支援活動参加の経緯

2009 年にネパール中西部山間地域で下痢疾患が蔓延した際の現地活動に参加したこと、2010 年 1 月のハイチ地震の直後に支援活動に参加したことより、いずれの活動内容も今回の活動内容と重なる部分も多かったため経験が生かせるのではないかと思いました。

2）出発から帰国までの活動

12 月 6 日　ハイチ　ポルトープランス到着

救世軍病院でコレラ患者を診る朴医師

7日　ニップ県フォンデネグ市へ移動。救世軍病院を見学。
8日　午前中はAkinの政府運営の総合病院のコレラ治療ユニットを見学。午後は救世軍病院のコレラ患者隔離病棟で患者診療をサポート。
9日　下痢・嘔吐で死亡者が出たという近くの集落を訪問。
11～15日　救世軍病院にてコレラ患者隔離病室で患者診療。
16日　午前中は救世軍病院のコレラ患者隔離病棟で患者診療をサポート。午後はポルトープランスへ帰路につく。
17日　山本先生とともに、ポルトープランスのNGOのGHESKIOの運営するコレラ治療センターを見学。
18日　ポルトープランス出発。

3）気付き・反省点

言語でのコミュニケーションが困難であったこと、当初は現地の人のジェスチャーさえもよくわからなかったことが非常に困難でした。基本的な現地語のカードを作っていただき少しやりやすくなりました。英語以外の言語も少し使えるようになると役にたつと思いました。事前に現地語についても時間があれば調べておこうと思いました。

4）次回参加される医師や看護師への提言

患者さんの衛生観念などは日本とまったく異なり、医療施設の装備も日本のようには行きませんでしたが、コミュニケーションができればなんとかなりそうな気がしました。身体所見はとれるものの通訳してくれる方がいない場合、病歴聴取が非常に困難な場合は心配になることもありました。今回は日中だけのサポートで、すでにシステムの出来上がっている病院で手伝う、というスタイルでしたので、医療関係者とコミュニケーションできれば何とかなったようでした。

5）AMDAへの提言

準備や資金面で非常に大変なことであると認識しておりますが、今後も緊急医療支援を広く行っていただきたいと思います。今回のような組織だったサポートと医療以外の知識が必要な状況では、医療関係者が赴く、というだけでは限界があることもあると感じました。疫学の専門家、水道関係や下水関係、その他状況に応じた技術者の方も継続的に赴く機会があれば今後さらに活動の規模を広げるのに大きなサポートになるのではないかと感じました。大きな規模での派遣となりますと、資金、事前調査、資材や通訳を含めた人材の供給など、多くの面で困難なことも多いと思いますが、今後医療支援活動の拡大には必要になるのではないかと思いました。

救世軍病院で現地スタッフに説明する松本看護師

＊ 松本　明子　看護師

派遣期間：2010年12月1～20日（報告書から抜粋）

12月7日、大統領選・中間発表がある日にポルトープランスをフォンデネグへ向けて出発。選挙中間発表に対して暴動がハイチ各地で起こりはじめ、この周辺でも10日まで主要道路が町ごとで封鎖されるという状況であった。その上雨天であり、道路封鎖のため病院へアクセスができずコレラ感染拡大の可能性が高くなった。

12月11日から道路封鎖解除となりコレラ患者が次々と運ばれてきた。

12月14日、新入院患者が増え20人以上のコレラ患者を少数のスタッフでケアをしなければならなかった。
コレラ患者はコレラ専用ベッド（トイレがその場でできるよう穴が開いているもの）で治療を受ける。症状は持続的な水様性下痢、嘔吐、腹痛である。治療は、脱水に対しての治療で最初の30分で1リットルの点滴を行い、その後も点滴を続けなくてはいけなくて、点滴の管理が大切である。ここでは家族が付き添うのが当たり前であり、排泄物の処理を行うのも家族である。二次感染を防ぐため、家族も医療者も使い捨ての手袋をつけ、消毒を常に行わなくてはいけない。家族への衛生教育指導も重要な仕事である。
コレラ患者の中には、マラリアなど他の疾患を併発することがありそれらの治療にもあたった。コレラ患者病室での治療は、家族の協力を得て行われた。

病院を去る日（12月17日）に、やっとコレラ患者用のテント（コレラ治療センター／ユニット）設置の動きが見られ、今後は治療、消毒、衛生教育も十分に実施できることが期待できる。

フランス語を少ししか話せない私にとっては、コミュニケーションをとることが困難であった。さらにハイチはクレオール語（フランス語、スペイン語、現地語がミックスしたもの）を話すため、最低限のクレオール語を覚える必要性があった。最低限の言語で新入院患者や家族に説明を行うと、前からいた家族や患者たちが追加説明を行ってくれた。現地の人たちも、私たちとコミュニケーションを取ろうと努力していた。英語やスペイン語が少しできる人たちは英語やスペイン語で話しかけてきた。クレオール語だけで自分の意思を伝えようと身振りや行動で示していた。必要性があると人は自然と努力をするものだと実感した。また同じ目的を持っているとコミュニケーションが取り易いと実感した。アフリカの匂いがいっぱいのハイチをまた機会があれば訪れたいと思った。

2011年を迎えて ―「市民参加型人道支援外交」の年に―

AMDAグループ 代表　菅 波　茂

20世紀は大きなイデオロギーの時代だった。実体のない、主義と名がつく動きに振り回された時代ではなかったのか。「Global thinking, Local action」である。「国際人」がその象徴だった。

世界の人たちが日本に関心を抱く3つの項目がある。「平均寿命世界一」、「戦後の奇跡的な経済復興」そして「幕末の非植民地化」である。日本人ならこの3項目に答えを用意しなければならない。この3項目を達成した日本人は「国際人」だったのだろうか。むしろ、自分の職業、自分の生活そして自分の家族を大切にした人たちだった。

昭和44年に小田実の「何でも見てやろう」を懐に抱き、アジアを10ヶ月間のヒッピーほろほろ旅をした。昭和46年にミャンマーとの国境地帯にあるタイの少数民族の開拓農場に、医学生主体の、第一次岡山大学クワイ河医学踏査隊を派遣して寄生虫や日本脳炎の調査をした。以来40年になる。昭和59年に設立したＡＭＤＡは、現在では国連NGOとして29ヶ国に支部をもち、今までに52ヶ国、120件以上の紛争地や災害被災地に多国籍医療チームを派遣してきた。海外にも多くの信頼できる友を得た。しかし、誰一人として「国際人」はいなかった。家族を、故郷を大切にしている人たちだけだった。「Local thinking, Global action」が事実だった。

「自分の職業、自分の生活そして自分の家族を大切にしている人」を共通項に、紛争や災害時に助けられた側の市民が次回には助ける側になる、相互扶助の下に信頼構築をして世界平和に寄与する。これが市民参加型人道支援外交である。ただし、世界の80%が血縁共同体社会であり、血のつながりのない他人にとってそれは絶縁共同体社会である。その絶縁共同体社会に他人が迎え入れられる数少ない機会が、紛争や災害により、命の存亡の危機に瀕した時の「まさかの時の友が真の友」となる時である。世界の市民間の信頼構築の入り口開門である。

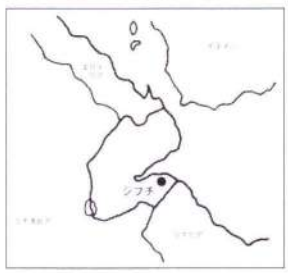
第二次世界大戦で日本は国内外に膨大な数の死者をだした。「世界から孤立しないこと」が日本の外交の基本である。外交には3種類ある。国家だけができる外交。国家と民間が共同でできる外交。民間のみができる外交。国家だけができる外交の限界が21世紀の課題である。BBCの調査によれば、日本は世界で最も嫌われていない国である。最も好かれている国ではない。少しでも好かれる国になる。親日を増やす。これが人道支援外交の目的の一つである。

21世紀は政治・経済的に大混乱の時代である。国家やNGOが人道支援を専門とする時代から、市民が人道支援に直接参加する時代が来た。なぜなら、信頼にもとづく人間関係がすべての基本となる時代になるから。

ジブチ大統領から国家勲章オフィシエ章（勲４等）を受章

右からジブチ大統領、菅波代表、AMDA顧問高岡医師

ジブチでの活動



◆ AMDAのジブチでの活動は1993年から始まっている。1992年、ソマリア内戦激化により住み慣れた場所からジブチへ逃げてきた多くの難民へ緊急医療支援を実施するため、AMDA多国籍医師団の活動がスタートした。それから、約15年間、難民キャンプでの医療活動を中心に、ジブチ市内病院での医療支援、帰還難民への帰還前健康診断、難民およびジブチの貧困者への毛布配布（アフリカへ毛布をおくる運動）等、長い歴史を積み重ねてきた。この功績に対し、12月21日駐日ジブチ大使館において、来日中のイスマイル・オマール・ゲレ・ジブチ共和国大統領から国家勲章オフィシエ章（勲４等）が授与されたものです。

長期事業 ー AMDA バングラデシュの活動紹介

AMDA 支部の中でも活発な支部の一つである AMDA バングラデシュは、1992 年のミャンマーからのロヒンギャ難民に対する医療救援活動以来、国内外での人道的支援、特に自然災害の被災者に対する医療救援・復興支援に取り組んできました。バングラデシュ国内において、貧困の中に暮らす人々は、災害に見舞われるたびに一層の不安と困難に直面します。こうした人々のコミュニティが自立していくには、長期的で持続的、総合的な社会経済開発計画が必要だということです。この認識に基づいて、1998 年に AMDA バングラデシュ総合計画（AMDA Bangladesh Complex: ABC）が生まれました。ABC は、①低価格な医療サービス、②職業訓練、③マイクロクレジット、④コミュニティ学習センター、から成る総合プログラムです。これを具体化するために、AMDA バングラデシュは、日本政府の無償援助や AMDA インターナショナルの支援を受けて、首都ダッカから車で一時間のムンシガンジュ県ガザリア郡ホッシンジ村に、2002 年から 2005 年にかけてヘルス・センター、職業訓練センター、コミュニティ学習センターを備えた施設を開設しました。

ヘルス・センターでは、コミュニティ内でも特に貧しい人々（土地を持たない人々、貧しい女性など）に一般的な診療と助産、妊産婦への検査、乳幼児ケアなどを低価格または無料で行い、ヘルス・ワーカーによる移動サービスを提供しています。これらの人々は感染症の予防や治療に関する適切な知識を持たず、環境衛生も維持されていないので、予防可能な病気に罹患し、貧血や栄養失調にかかっていました。さらに、診療所へのアクセスの困難にも悩んできました。センターの開設は、貧しい人々が初めてヘルス・サービスを受ける機会を作り出しています。

職業訓練センターは、コンピューター、木工、溶接、電気・電子、縫製、手工芸の技能訓練を提供しています。木工、縫製、手工芸部門では、オン・プロダクション・トレーニング（製作しながら訓練を受けること）により、研修生は技能を伸ばしながら製品を販売することで報酬を受け取ります。2009 年までに 1,600 人の若者に様々な技能訓練を提供し、そのうち 1,049 人が雇用されました。

マイクロクレジットのプログラムは AMDA バングラデシュが 1999 年に開始したもので、当初の資本金 25,000 ドル（1,200,000 タカ相当）は日本の AMDA 本部から提供されました。2009 年現在、カザリア郡の 5 つの村で実施されています。このプログラムは、経済的に恵まれない人々のために、小規模事業と小規模ビジネス・ベンチャーを通じて収入の道を作ることを目的としています。2009 年までに、マイクロ融資の受益者は累積 17,107 人、ローン支払金は累積 295 万米ドルに達しました。非営利組織である AMDA バングラデシュの事業の中で収入を生み出している唯一のプログラムです。

コミュニティ学習センターは、非公式技能訓練・教育の場であり、地域の人々の集いの場として、人々が自分たち自身の発展のために集い、ともに過ごし、ともに働く場となってきました。青年フォーラム、母親フォーラム、父親フォーラム、漁師のフォーラムなど、さまざまなフォーラムがあり、社会問題に基づくグループ・ディスカッションやミーティング、セミナーを行っています。また特に青年層を対象として

サイクロンシェルター 2009

います。ガザリア郡の青少年人口は推定 5 万人で、郡の総人口の 3 分の 1 に当たります。彼らが情報・文化・教育の交流を通じて、また自分自身を有能な市民として成長させることの重要さに気づくことによって、健康な成人として成長できるよう、手助けできればと考えています。

これら 3 つのプログラムと並行して、AMDA バングラデシュは、日本とバングラデシュの学校交流の橋渡しもしています。2005 年以来、岡山県の玉野市立東児中学校とガザリア郡テンガチャーハイスクールとの間で交流が行われています。

2010 年には、AMDA バングラデシュ支部長、同ディレクターそれぞれが、新しくなった AMDA 本部を訪ねる機会がありました。これから一層 AMDA 本部と AMDA バングラデシュが太い絆で結ばれ、有益な活動を実施すべく研鑽を続けるものです。

AMDA バングラデシュを訪ねて

AMDA: 特定非営利活動法人アムダ　理事　**日南　香**

「貧困、洪水」という、とかく暗いイメージがつきまとう国バングラデシュ。だが訪ねてみてモノ貧しくとも心豊かな国であることに心をうたれた。とにかく人々が底抜けに明るく親切で真面目なのだ。私がフィールド視察に参加した目的のひとつは、AMDA バングラデシュの活動を知ることであった。首都ダッカにその本部があり、ガザリアが活動地である。スタッフの統制のとれた仕事ぶりは見事で、ミーティングや交流プログラムに参加してみたが、仕事に対する使命感とやる気が旺盛なことに強い感銘を受けた。そこには、チーフであるラザック氏の、国の将来を思う強い信念が活動を支える源泉となっており、日本も見習うべきことが少なくないと感じた。

ガザリアの学校訪問でのこと、この国の訪問 8 回目という AMDA ボランティアセンター参与の竹谷氏を大勢の子どもたちが大歓声で取り囲み迎えた。歓迎の輪はいつまでも解けようとせず、まさに感動のひと幕であった。紙面の都合で割愛するが、この国の発展を阻害している要因は、極端なインフラの遅れとガバナンスの弱さであろう。市民が「自立」に目覚めたとき、富める国に向けて歩を早めることも決して夢ではない。ゴールの見えない AMDA バングラデシュの地道な活動ーしかしその存在と実績は確実に市民権を得ていると実感した。事務局長のラザック氏をはじめスタッフ諸氏の一層の活躍を祈るや切である。

同行の竹谷参与そして看護師の佐々木さん、想い出の旅をありがとう。

(2010 年 11 月 21 日～27 日バングラデシュ滞在)

長期事業 ー インド ブッダガヤ AMDA ピース・クリニック

AMDA ピース・クリニックがあるインド、ビハール州ブッダガヤは、釈迦が悟りを開かれた仏教の聖地として世界遺産に登録されているため建築物は仏教施設に限られています。当クリニックは、岡山市の日蓮宗太生山一心寺のご協力を得て、現地に信託財団を設立。一心寺インド分院に隣接して建設され、2009 年 11 月、インドの伝統医療であるアユルヴェーダ―治療を提供するクリニックとして開院しました。海外からの観光客にアユルヴェーダーマッサージを提供し、その収益で地元住民に医療サービスを提供することを目的としています。現在は、スリランカ人のアユルヴェーダ―専門医師に加え、セラピストと助手が常駐しています。

同クリニックの院長であるクサラ医師からのレポートによると、同クリニックは周辺村落との相互関係を築きコミュニティ医療活動を開始するためのプログラムをいくつか打ち出しており、その一環として、2010 年 10 月 20 日、ブッダガヤから 3 キロ離れたモチャリ村（人口 2000 人）において無料診療キャンプを実施しました。目的は、① AMDA ピース・クリニックに来院できない人々に援助の手を差し伸べること、②モチャリ村の村民にアユルヴェーダ・セラピーを紹介すること、③貧しい人々と AMDA ピース・クリニックとの橋渡しをすること、です。この日受診した患者数は 105 人で、主な症例としては、関節炎、胃炎、咳及び風邪、頭痛、皮膚病及びアレルギー症状、喘息及び気管支炎、などが見られました。クサラ医師によると、モチャリ村でこのような無料診療キャンプが行われたのは初めてなので、村民は朝から AMDA チームの到着を心待ちにしていたとのこと。AMDA 医療チームが一致協力して働いたことで、村民は AMDA ピース・クリニック及びアーユルヴェーダーという医療方法に深く関心を示したそうです。村からは、毎月このような無料医療キャンプを実施してもらえないかという要請がありました。

無料キャンプ実施の様子

また 2010 年 11 月 23 日には、AMDA ピースクリニック開設 1 周年記念式典が行われ、これを機に地元の医師と協力して口唇口蓋裂の手術を行いました。一回の手術で治療を終えると診断された 3 カ月の赤ちゃんから、3~5 歳の幼児、そして貧しくて長年手術を受けることができなかった 23 歳と 35 歳の女性など、合計 7 名に手術を無料提供しました。とくに 35 歳の女性は、長年の苦しみから解放されたことをとても喜んでくれました。

AMDA ピースクリニックはこれからもインド連邦で最貧州であるブッダガヤの人達のために医療支援を続け、今後は現地医師会などと協力して、超音波診断装置など必要な機器と訓練された医療スタッフで運営される救急医療センターとして当クリニックを整備していきたいと考えています。

AMDA スリランカ医療和平事業地・キリノッチを再訪して

AMDA では、内戦後のスリランカにおいて 2003 年 4 月から北部キリノッチ (ヒンズー教・タミル地域)、東部トリンコマリ (イスラム教・タミル地域)、南部ハンバントタ (仏教・シンハラ地域) の 3 地域において 2006 年 7 月まで、巡回診療・健康教育を中心としたスリランカ医療和平事業を実施してきました。その後、内戦は再び激化し、LTTE(タミルイーラム解放のトラ) が治めていたキリノッチから北東部にかけては激しい空爆に曝されました。スリランカ医療和平事業で現地事業副統括職を務めていたニッティヤン・ヴィーラヴァーグ（現 AMDA 本部緊急救援担当）が 4 年半ぶりに、この地を訪問し、かつてのスタッフ等との再会を果たしました。が、スタッフ等は皆、その親族や友人の中に一人は昨年の内戦による犠牲者をもち、またスタッフの中には未だに行方不明のままという人もいました。彼の報告から抜粋し紹介します。

長い内戦を経て、夫と 11 歳の娘、10 歳の息子の 4 人家族でキリノッチに来ていたヴィジター・ラメシュワランは、キリノッチでの AMDA の巡回健康教育事業で 3 年間ともに働いた看護師です。AMDA の事業終了後間もなく再び始まった内戦の激化により、またも家や家財道具全てを失い、恐怖の中で暮らすこととなりました。2009 年には絶え間なく続く爆撃の中で逃げまどい、時には爆撃による犠牲者や、餓死者の遺体のそばで夜を明かさねばならないこともありました。私は、子どもたちが目にした残虐行為や多くの死というものが、トラウマとなって残ることがないことを心から願います。

2009 年の激しい内戦が終了した直後には、この地域のタミル人は皆、家族離れ離れで抑留キャンプで約 6 か月間暮さねばなりませんでした。ヴィジターの 11 歳の娘は親と離れ離れになったこの間に重い病気に罹っており、家族が再会できて九死に一生を得ました。抑留を終え 2010 年になり元住んでした場所に戻ってみると、跡形もなく何もかも無くなっていました。彼女ら一家は現在、国際機関により設営された仮設テント住居で暮らしています。夫は大工ですが、道具類もすべて失い、仕事に就くのは大変困難な状況です。しかし、一家は無一文から生活の再建を行おうと前向きに生きています。彼女の経験と現状は殆どのこの地域 (キリノッチと周辺北東部) のタミル人が共有するものです。

スリランカ医療和平事業実施当時に日本人派遣者とともに学校を巡回し健康教育を実施するヴィジター（右）

Nithian VEERAVAGU
ニッティヤン　ヴィーラヴァーグ

AMDA の活動は皆様からのご協力で実施しています　一部をご紹介いたします

笠岡国際交流協会様

笠岡市立新吉中学校様

株式会社イリエ様

株式会社アルファ様

特定非営利活動法人　一粒会様

全日本極真会空手道選手権大会様

おかやま山陽高校様

倉敷市立倉敷工業高校様

2010 年 10 月～ 12 月の動き

＜講演＞		
10 月 2 日	岡山県	国際救援活動要員養成講座
10 月 4 日	岡山県退職小学校校長会	岡山県退職小学校校長会総会講演会
10 月 5 日	日本国際連合協会関西本部	国連デー記念講演会
10 月 14 日	おかやま女性国際交流会	海外派遣 25 周年記念交流会
10 月 14 日	笠岡市立神島外中学校	文化祭
10 月 14 日	岡山県マルティメディア・フォーラム	第 64 回研究会
10 月 16 日	神戸女子大学グローバル・ローカル研究会	公開フォーラム基調講演
10 月 21 日	岡山市立一宮公民館	高齢者教育
10 月 21 日	大阪府済生会中津医療福祉センター	組合創立 60 周年記念行事
10 月 22 日	倉敷市立玉島高等学校	人権教育・国際理解教育
11 月 11 日	倉敷ロータリークラブ	例会卓話 /AMDA の理念と活動
11 月 12 日	岡山市立福田中学校	国際理解教育
11 月 15 日	岡山県立岡山一宮高等学校	発展途上国の医療について
11 月 19 日	桑名ロータリークラブ	例会卓話 /AMDA の緊急医療支援
11 月 26 日	岡山市立高島公民館	シルバー大学 /AMDA の国際協力について
11 月 29 日	大阪教育大学附属池田中学校	ボランティア学習 / ハイチ地震緊急救援活動
12 月 1 日	岡山市立伊島小学校	総合学習 /AMDA の緊急救援活動
12 月 17 日	玉野市立宇野中学校	総合学習 /AMDA の活動と国際理解
＜大学等講義＞		
9 月 16 日、10 月 7、14、21、28 日		相生市立看護専門学校第一看護学科／災害看護
9 月 25、26、27 日		岡山県立大学大学院／災害医療援助特論
10 月 28 日、11 月 4 日		岡山大学教養教育／生きる・・・愛すること
11 月 26 日、12 月 10 日		岡山大学薬学部／国際医療保健学
11 月 17、24 日、12 月 1、8、15 日		福山平成大学看護学部／国際援助と保健資源
＜イベント＞		
10 月 30 日	AMDA ハイチ地震復興支援スポーツ親善交流・参加中学生による活動報告会	
11 月 6 日	RNN 第 7 回ヒーリングコンサート 癒しと祈りの和奏会／ハイチ、チリ、中国青海省地震犠牲者への慰霊と復興を祈る集い	
11 月 21 日	AMDA 市民参加型人道支援外交第一回円卓会議	

第 54 回洋蘭展

主　催　岡山県洋蘭協会　日本蘭協会東中国支部　　共　催　AMDA
会　期　3 月 11 日（金）～ 13 日（日）　9 時 30 分～ 17 時（最終日は 16 時まで）
会　場　国民宿舎サンロード吉備路
入場料　無料
※今年も洋蘭協会様が洋蘭展での花の販売で AMDA にご協力くださいます。皆様のお越しをお待ちしております。

■ AMDA の活動にご支援のお願い

ご寄付の際には郵便払込取扱票をご利用ください。
※郵便振替
口座番号　01250-2-40709
口座名　特定非営利活動法人アムダ

※楽天バンクからのご寄付も受け付けております。
詳しくはホームページをご覧ください。
http:/amda.or.jp

支援者紹介

一般社団法人 神戸市薬剤師会

神戸市薬剤師会松岡一典会長（右）

神戸市薬剤師会は、神戸市内の薬局などに勤務、または市内在住の薬剤師によって組織されています。

主な事業として、医療はもとより、介護・福祉・学校環境衛生事業への参画や教育研修などを行っています。それらの事業を通して、医薬品の供給と安全な使用、公衆衛生の向上に努め、地域の皆様が健康的な生活を送ることができるように活動しています。

国際都市神戸の薬剤師会として世界に目を向け貢献をするという思いからAMDA 募金に協力させて頂いております。1999 年に 30 店舗の薬局の店頭に募金箱を置くという形で始まり、徐々にその輪が広がっています。

そのほかにも学校薬剤師活動として、小中高校の児童や生徒に対する「医薬品の適正使用」の普及や薬物乱用防止、禁煙、エイズ拡大防止などの啓発活動も行っています。

社会福祉法人 恩賜財団済生会支部 大阪府済生会 中津医療福祉センター 職員組合

「救える命は誰でも」

大和謙二組合長（済生会中津病院小児科副部長）（右）

済生会中津医療福祉センター職員組合は、組合創立 60 周年を記念し、去る 10 月 21 日（木）寄付金贈呈式並びに、AMDA の活動内容についてご講演いただきました。当センターや組合のモットーは「救える命は誰でも！」ですので、そのような活動をより広く担っておられる AMDA の皆さんのお役にたちたいという組合員の総意です。寄付金は組合員を代表し大和組合長から満面の笑みで手渡されました。講演では日頃経験できない貴重なお話を聞くことができ、医療の社会的側面に対する組合員の理解を高めるための有意義な時間になりました。今後も機会があればこのような活動を行ないたいと考えております。

グンゼラブアース倶楽部

グンゼ（株）コーポレートコミュニケーション部 CSR 推進室産業カウンセラー吉川智美様（右）

グンゼラブアース倶楽部はグンゼ創業 110 周年記念に誕生した社会貢献を推進するしくみです。グンゼグループの有志会員からの寄付と会社のマッチングギフトを原資とし、「持続可能な社会形成」のために活動している団体への支援等を通じて、グンゼグループの社会貢献活動を推進しています。発足当初は寄付活動が中心でしたが、支援団体のみなさまとの協働活動に少しずつつながっています。

一市民、一企業市民としてわたしたちにできることは一体なんだろう？一人ひとりの力は小さくても、皆で集まって社会と手をつないでいけばきっと生み出せるものがあるはず。わたしたちはその思いを「LOVE EARTH、LOVE HEART」の言葉に託して、自ら「何かやってみよう」の気持ちと「一緒にやってみよう」の気持ちをたずさえてこれから AMDA さんとつないだ輪を広げていこうと思います。

連携協定調印式後の FC 千里中央の岡元監督（後列右から 3 人目）とみなさん

FC 千里中央と連携協定

2010 年 8 月に実施したハイチ復興支援スポーツ親善交流で、地震被災者の少年たちとドミニカの少年たちとともにサッカー交流を行った FC 千里中央チームが、12 月 27 日岡山にて、AMDA ボランティアセンターと連携協定を結びました。

東濃特別支援学校

後藤　正樹

本校は、小学部から高等部までを設置する知的障がい特別支援学校です。今回「『ひとつまみの心』から『ひとまたぎの心』へ」をキャッチフレーズに、自分たちのちょっとした力が、海を越えて世界の困っている人たちを助けることを目指して、古本を回収し業者に買い取っていただいたお金を AMDA に寄付をする活動に取り組みました。

家庭から集められた古本を所定の位置に運んだり、箱詰めをしたりと、児童が自分でできることを考え、活動に参加をしました。多くの子どもたちが、AMDA から借りたパネルをじっと見ており、遠く離れた海外の人たちへ自分たちの気持ちが届くことを願っているようでした。

AMDA の活動パネルに見入る子どもたち

ご案内　大丸神戸店 9 階レストラン前展示スペースにて、1 月 29 日（土）30 日（日）に、AMDA のハイチ地震を中心に緊急救援活動パネル展が開かれます。どうぞご来場ください。